

# うまい商売

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫



あるお百<sup>ひやくしやう</sup>姓<sup>せい</sup>さんが、牝牛<sup>めうし</sup>を市場<sup>いちば</sup>へ追<sup>お</sup>つて行って、七ターレルで売<sup>う</sup>つてきました。かえり道<sup>みち</sup>に、池<sup>いけ</sup>のはたをとおらなければなりません。まだ池<sup>いけ</sup>までこないうちに、もう遠<sup>とほ</sup>くのほうから、カエルたちが「アク、アク、アク」と、なっているのがきこえてきました。

「まったく、うるさくがなりたてやあがる。」

と、お百<sup>ひやくしやう</sup>姓<sup>せい</sup>さんはひとりごとをいいました。

「おらのもらった金<sup>かね</sup>は七<sup>しち</sup>だぞ。八<sup>はち</sup>じゃねえや。」

お百姓<sup>ひやくしやう</sup>さんは水<sup>みづ</sup>ぎわまできますと、カエルたちにむかつて、

「てめえたちや、なんてばかだ！ わからねえのかよ。七<sup>しち</sup>ターレルだぞ。八<sup>はち</sup>じゃねえんだ

」。

と、どなりました。

それでも、カエルたちは、やつぱり「アク、アク、アク」と、なきつづけています。

「ようし、ほんとにしねえんなら、てめえたちの目のまえで勘<sup>かんじよう</sup>定<sup>てい</sup>してみせてやらあな

」。

こういつて、お百<sup>ひやくしやう</sup>姓<sup>せい</sup>さんはポケットから金<sup>かね</sup>をとりだして、二十四グロッシエンずつで一ターレルと、合計<sup>ごうけい</sup>七ターレルをかぞえあげてみせました。

けれども、カエルたちは、そんな勘<sup>かんじやう</sup>定<sup>てい</sup>にはおかまいなしに、またもや、「アク、アク、アク」と、なきたてました。

「ええい。」

と、お百姓<sup>ひやくしやう</sup>さんはすつかり腹<sup>はら</sup>をたててどなりつけました。

「これでも気がすまねえんなら、てめえたちで勘<sup>かんじやう</sup>定<sup>てい</sup>しろい。」

そして、カエルたちのいる水のなかへ、金をそっくりほうりこみました。お百姓<sup>ひやくしやう</sup>さんはそのまま立<sup>た</sup>っていました。カエルたちが勘<sup>かんじやう</sup>定<sup>てい</sup>をすまして、金をかえしてくれるまで、待<sup>ま</sup>っているつもりだったので。ところが、カエルたちはがんで、ひっきりなしに、

「アク、アク、アク」と、なきたてるばかりです。そして、金などはなげかえしてもくれませんでした。

お百<sup>ひやくしやう</sup>姓<sup>せい</sup>さんはなおしばらく待<sup>ま</sup>っていました。そのうちに日がくれてきましたので、うちへかえらなければならなくなりました。そこで、カエルたちを口<sup>くち</sup>ぎたなくのしつて、どなりました。



「やい、やい、水んなかのバチャバチャ野郎やろうの、でか頭の、ぐりぐり目玉め。てめえたちや、ばかでつかい口をしてやがって、耳もいたくなるほどギヤア、ギヤア大きわぎしやあがるくせして、七ターレルの勘かんじょう定じょうもできねえじやねえか。てめえたちの勘定がすむまで、おらがここで待まつてるとでも思おもつてんのか。」

こういいすてて、お百ひやくしやう姓せいさんは歩きはじめました。しかし、カエルたちは、あいかわらずそのうしろから、「アク、アク、アク」と、ないていました。で、お百姓さんはぶんはら腹はらをたてて、うちへかえりました。

それからしばらくして、お百姓さんはまた牝牛めうしを一頭とう買かいました。お百姓さんはそいつを殺ころして、さて、どのくらいになるだろうかと、胸むねで計けい算さんをしてみました。肉にくをうまく売うれば、牝牛めうし二頭にとうぶんぐらいの金かねにはなるでしょうし、それにまだ皮かわものころというものです。そこで、お百姓さんは肉をかついで町へでかけました。町の門のまえまできますと、犬いぬがひとかたまりになってかけてきました。みれば、大きな猫りやうけん犬いぬが先頭せんとうにたっています。そいつが肉のまわりをとびまわって、くんくんかきながら、「ワス、ワス、ワス、ワス」と、ほえたてました。

ところが、犬がいつまでたつてもなきやまないので、お百ひやくしやう姓せいさんは犬にむかってい



いました。

「よしよし、わかった、わかった。おめえ、この肉がちつとばかしほしいもんだから、『ワス、ワス（すこしの意味）』っていつてんだな。だがな、おめえにこいつをくれちまったら、おらのほうがうまくいかねえでの。」

けれども、犬はやつぱり「ワス、ワス」とへんじをするばかりです。

「おめえ、ほんとに肉をみんなくつちまわねえか。そこらにいるおめえのなかまのことも、うけあえるか。」

「ワス、ワス。」

と、犬がいました。

「ようし、おめえがそんなにまでいうんなら、おめえにまかせんべえ。おら、おめえをよしく知ってる。おめえの奉公さきも、ちやあんとかわかってる。だがな、いいか、三日たったら、きつと金をもらうぞ。約束をまもらなかつたら、ただではおかねえぞ。とにかく、おめえがおれんとこへ金をもつてきさえすりやいいんだ。」

それから、お百姓さんは肩から肉をおろして、また、いまきた道をひきかえしました。犬どものほうは、たちまち肉をめがけておどりかかって、「ワス、ワス」と、大声に



ほえたてました。

お百姓さんはそれを遠くのほうで書いて、ひとりごとをいいました。

「ほほう、あいつら、みんなちつとばかしほしがってやがる。だが、でつかいやつが、おらにうけあつてゐるだ。」

三日たちますと、お百姓さんは、今夜は金かねが手にへえるぞと、考えて、ほくほくしていました。ところが、だれも金をはらいにはやつてきませんでした。

「もう、だれも信用しんようできねえ。」

と、お百姓ひやくしやうさんはいいました。

とうとう、がまんができなくなつて、お百姓さんは町の肉屋にくやへでかけていき、金かねをはらつてくれとねじこみました。肉屋はじようだんだとばかり思つていましたが、お百姓さんはいいました。

「じようだんごとじやあねえ。おら、金をもらうだ。三日めえに、おめえさんとこのでつかい犬が、ぶち殺ころした牝牛めうしを、まるごともつてこなかつたかね。」

肉屋にくやはおこつて、そこにあつたほうきの柄えをつかむと、いきなりお百姓ひやくしやうさんをたたきだしてしまいました。

「だが、待てよ。世のなかにやあ、まだ道理つてものがあらあな。」

お百姓さんはこういうと、王さまのお城へでかけて行って、うったえごとをきいてください、と、ねがいでました。お百姓さんは、王さまのまえにつれだされました。王さまはお姫さまといっしよにすわっていましたが、お百姓さんを見ますと、どんなめにあつたのかと、たずねました。

「ああ、犬とカエルがおらのものをとりましたで。それから、肉屋のやつは、金のかわりにおらに棒をくらわしたでござえます。」

こういつて、お百姓さんは、ことのしだいをくわしく話しました。それをきいたお姫さまは、大きな声でわらいました。すると、王さまはお百姓さんにいいました。

「いまここで、おまえのもうすことがただしとはきめられぬが、そのかわり、おまえにはわしのむすめをよめにやろう。むすめは生まれてからまだいちどもわらつたことがない。それがいま、おまえをわらつたのだ。わしは、むすめをわらわせたものに、むすめをやる」と約束してあるのだ。おまえは、幸運のお礼を神さまにもうすがよい。」

「いやあ、お姫さまなんぞいりませんや。うちにや、たつたひとりのかかあがいますだが、あいつひとりでもおおすぎまさあ。うちへけえりや、あつちのすみにもこつちのすみにも、

かかあが立つてるような気がしますだ。」

と、お百姓さんはこたえました。

すると、王さまはおこつて、

「おまえは礼儀れいぎを知らぬやつだ。」

と、いいました。

「でもなあ、王さま。」

と、お百姓さんはこたえました。

「牛からは、牛ぎゆう肉にくしかとることはできねえでござえますでな。」

「待まて。」

と、王さまがまたいいました。

「おまえには、べつのほうびをつかわすことにする。いまはさがって、三日たつたら、もういちどまいれ。そのとき、五百つかわそう。」

お百ひやく姓しやうさんがお城しろの門かどのまえまできますと、番兵ばんべいがいました。

「おまえはお姫ひめさまをわらわせたな。なにかさうとうのごほうびをいただいたらう。」

「うん、そのとおりだ。」

と、お百姓さんはこたえました。

「五百くださるってえことだ。」

「おいおい、おれにもちつとわけてくんなよ。おまえ、そんなにたくさんの金かねをもつて、どうするんだ。」

「おめえのこつたから、二百やらあ。三日たつたら、王さまのところへ名のつてでて、それだけもらいな。」

と、お百ひやく姓しょうさんがいました。

ひとりのユダヤ人がその近くにいて、この話をきいていました。ユダヤ人は、すぐにお百姓さんのあとを追おつていつて、いいました。

「すばらしいことになりましたなあ。おまえさんは、なんてしあわせものなんだろう。わたしがりようがえ 両替りやうがえして、小銭こぜににかえてあげましょう。ターレルのような大きな金じゃ、しょうがないでしょうから。」

「ユダ公こかい。」

と、お百姓さんはいいました。

「おめえにや、まだ三百のこつてら。いますぐ、小銭こぜにで三百くんな。あと三日たちや、王

さまんとここで、それだけはらつてくださらあ。」

ユダヤ人はちよつとしたもうけにほくほくして、質しつのわるいグロツシエン貨かでこの金きん額くをもつてきました。グロツシエン貨なら、三枚まいでも、質しつのいい金かねの二枚ぶんの値ねうちしかないのです。

三日たつたところで、王さまのいつけどおり、お百ひやくしやう姓しやうさんは王さまのまえにでました。

「この男うわぎの上着うわぎをはぎとれ。」  
と、王さまがいました。

「五百つかわすのだ。」

「あの、もうし。」  
と、お百姓ひやくしやうさんはいました。

「その五百は、もうおらのもんでござりません。二百は番兵ばんべいにくれてやりました。あとの三百は、ユダヤ人が両替りやうがえしてくれました。法律ほうりつのうえからいや、おらのものは一文いちもんもねえでござります。」

そこへ、番兵とユダヤ人がやってきて、お百ひやくしやう姓しやうさんからうまくせしめたつもの金かね

を、いただきたい、ともうしてました。そのため、ふたりはまちがいなくその数だけうたれました。番兵はじいつとがまんしていました。もうまえから、この味を知っていたからです。けれども、ユダヤ人はひいひい泣きわめいて、

「ああ、いたつ。これが約束のターレル金貨ですかい。」  
と、いいました。

王さまは、お百姓さんをわらわずにはいられませんでした。そして、いままでの腹  
だたしさもすっかりきえてしまつて、こういいました。

「おまえは、ほうびをもらわぬうちに、なくしてしまつたから、わしがうめあわせをしてやろう。わしの宝ぐらへはいつて、ほしだけ金をもってくるがよい。」

お百姓さんはすぐさまとんでいつて、大きなポケットへ、はいるだけぎゆうぎゆうにつめこみました。それから、茶店へいつて、金をすっかりかぞえてみました。

ユダヤ人は、お百姓さんのあとからそつとついていつて、お百姓さんがひとりつぶつぶいつているのをききました。

「王さまのとんちきめ、やつぱりおらをだましやあがつた。こんなに金をくれなきや、おらの金がいくらあるだか、ちゃんとわかるになあ。これじゃ、手あたりしだいにねじこん

だやつが、いくらになるのか、見当もつきやあしねえ。」

「とんでもねえ。」

と、ユダヤ人はひとりごとをいいました。

「あの野郎、王さまのことを、あんなにひどくいつてやがる。ちよいと走ってつて、おとどけてこよう。そうすりや、このおれはごほうびがもらえるし、あいつは罰をくらうだろう。」

王さまは、お百姓さんのいったことをききますと、かんかに腹をたてました。そして、ユダヤ人にむかって、おまえいつて、そのふとどきものをひきつれてこい、といいつけました。

そこで、ユダヤ人はお百姓さんのところへかけつけました。

「おまえさん、ぐずぐずしないで、いますぐ王さまのところへいくんだよ。」

「どうすりやええか、おらのほうがよく知つてら。」

と、お百姓さんがこたえました。

「まず、おらにあたらしい着物をこせえさせてくんねえ。なあ、そうだろ、ポケットにこんなにたくさんのお金をもつてる男がよ、古いおんぼろ服のまんまでいかれもしねえじゃね

えか。」

ユダヤ人は、お百ひやくしやう姓せいさんがほかの上着うわぎをきないうちには、とてもつれていくことができなかとみてとりました。それに、王さまのいかりがしずまったら、じぶんはほうびももらえなくなりすし、お百姓ひやくしやうさんは罰ばつをうけないでもすむかもしれませぬ。そう思いますと、気が気でなくなりすました。そこで、

「おまえさんは友だちだから、ちよつとのあいだだけ、おれがきれいな上着をかしてやろう。人間てのは、なんでも愛あいの気持ちでやるものさ。」

と、いいました。こういわれすすと、お百ひやくしやう姓せいさんも承知しょうちしました。そこで、ユダヤ人の上着をきて、いつしよにでかけました。王さまは、ユダヤ人のつげ口したわる口のことをいいたてて、お百姓ひやくしやうさんをしかりつけました。

「あれまあ。」

と、お百ひやくしやう姓せいさんはいいました。

「ユダヤ人なんかのいうことはうそばかりでござえます。あいつらの口からは、ほんとのことはひとことだつてでたことはござえませぬ。だいいち、ここにいる野郎やろうなども、おらがこいつの上着うわぎをきているなんていいたててませぬだ。」



「なんだと。」

と、ユダヤ人はさげびました。

「その上着がおれのじやないか？ そいつは、おまえが王さまのまえにでられるように、つい、気やすい気持ちからかしてやったもんじゃあないか。」

それをきいて、王さまは、

「ユダヤ人は、わしかこの百ひやくしやう姓せいか、どつちかひとりをだましたにちがいない。」

と、いつて、またまた、さつきのターレル金貨きんかを、さらにいくつかユダヤ人にくらわせました。

お百姓さんのほうは、いい上着をきて、ポケットにたんまり金かねをいれて、うちへかえりました。そして、

「こんどは、うまくあてたもんだ。」  
と、いいました。



# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集(二)」偕成社文庫、偕成社

1980 (昭和55) 年6月1刷

2009 (平成21) 年6月49刷

※表題は底本では、「うまい商売《しょうばい》」となっています。

※誤植を疑った箇所を、「グリム童話集(二)」偕成社文庫、偕成社、1989 (平成元) 年5月26刷の表記にそって、あらためました。

入力：sogo

校正：チエコ

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# うまい商売

グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>